

プッサン作《勝利者ダヴィデ》(マドリード、プラド美術館)に関する一考察
—17世紀前半の「ダヴィデ」図像の多様化との関係から—

倉持充希 (京都大学大学院)

ゴリアテの頭部に視線を落とし、物憂げな表情を浮かべるダヴィデを描いたプッサン作《勝利者ダヴィデ》(マドリード、プラド美術館)には、ダヴィデに櫛の葉の冠を授ける勝利の擬人像や、その右手から黄金の冠を取るプットー、豎琴に凭れて涙を拭うプットーなど特筆すべき要素が見出され、先学が個々の着想源の特定を進めてきた。本発表では、17世紀前半の「ダヴィデ」を主題とする作品の流行と図像の多様化の中に本作品を位置づけ、その構想及び画家の様式形成について再検討を試みる。

まずプリニウス『博物誌』等から、櫛の葉の冠は都市を守った勇気ある兵士に授与される市民冠と同定でき、黄金の冠は王冠を意味することから、本場面では、ダヴィデの勝利と来たる王位継承が明示されつつも、ゴリアテ討伐を機にサウルの嫉妬に遭い、命を狙われる苦難を予期した若きダヴィデの不安や、猛者ゴリアテの死への洞察が示唆されていると推定できる。こうした瞑想的な「勝利者ダヴィデ」は、詩人マリーノも称賛したレーニの作品(パリ、ルーヴル美術館)の成功によって広く流布した表現であるが、レーニが古代彫刻を模した優美な等身大裸体像としてダヴィデを呈示したのに対し、プッサンはゴリアテの武具と頭部を戦勝記念碑に見立て、古代の石棺浮彫(ローマ、ヴァチカン美術館)に基づく勝利の擬人像をも導入している点に着目したい。本作品が制作された1628-29年当時、庇護者不在の苦境を脱しつつあった画家は、ヴァチカンのサン・ピエトロ聖堂祭壇画等に取り組む傍ら、収集家の期待を念頭に置いた中型絵画制作に注力していた。本主題の構想に際しても、ダヴィデの軍功の意味内容を踏まえ、古代の戦勝記念美術の形式を積極的に採用することでレーニの先例に対抗し、また同時期に盛んに描かれた、王冠と豎琴を携えて沈思黙考する、或いは豎琴を奏しつつ天を仰ぐ老境の「詩篇作者ダヴィデ王」の図像表現も視野に入れて豎琴を入念に描写するなど、同時代作家への競合意識を強く働かせていたことが窺われる。

同時に本作品には、画家の古代美術への傾倒が既に顕著に現れながらも、30年代後半以降の作品を特徴づける「荘重様式 *maniera magnifica*」は見られず、人物や風景を詩情溢れる色調で纏め上げた特有の様式が看取される。後にベッローリは本作を讃え「初期の様式 *prima maniera*」と称したが、当時人気を博していた画題にモチーフを加えて重層的意味を付与し、豊かな色彩によって主題に内在する情趣を存分にかき立てた本作品は、ローマという芸術的環境に順応しつつ独自性を発揮しようとした画家の当時の制作態度を反映するものと考えられる。さらに、本作品の注文主は目下不明であるが、40年代後半に本作を入手したジローラモ・カサナーテ枢機卿の財産目録を新たに検証することで、本作品の初期の来歴を確認し、受容状況についても考察を加えたい。